

はじめに

『わたしたちがみた当世美術館事情』は、京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース (ASP) 学科の2回生と3回生が、授業内で1年間取り組んだ調査をまとめた報告書です。

本学は芸術系の大学ですが、この学科の学生たちはいわゆる「制作系」ではなく、いかにすれば「アート」を社会や生活のなかに生かせるかという課題に、研究や実践を通して取り組んでいます。しかし、そうした大半も入学当初は「アート」という言葉を聞いても、「作品」や「作家」という限られた、もしくは漠然としたイメージしかもっていませんでした。「美術館」についても、個人差はあれ、高校までは学校見学で出かけていてもあまり縁のある存在ではなかったようです。ですが、この学科に入学した今は、美術館は学びの場であり、活動の場であり、そして将来の仕事場となるかもしれない大切な場所となりました。その美術館の活動と現状をよりよく知り、問題点や存在意義について考える機会にしたいと、本学科・福のり子教授により2006年度より開講されたのがこの「美術館調査」です。調査テーマや方法の設定、データの整理、分析ととりまとめ、すべて受講学生たちが自発的に考え、担当教員がそれをサポートしています。身の丈にあった、学生目線の、学生ならではの、美術館に対する素朴な疑問や関心が毎年大きく育ってきました。

この授業も今年度で5回目を迎え、年に一度刊行する報告書も5冊目となります。受講する学生は毎年入れ替わっていきますが、過去4冊の報告書に残された先輩たちの苦闘の跡、そしてだからこそ得られた大きな成果を糧に、調査テーマも多様化、かつ進化しています。すでになされたテーマの継続、展開調査もあれば、社会情勢や美術館をめぐる環境変化から新たに生じてきた課題に取り組むチームもあります。

この調査にご協力をいただきました美術館関係者の方々に、こころより御礼申し上げます。年々厳しくなる仕事環境の中、これほど書き込む箇所が多い、そしてときに応えにくい、素人らしい質問を含んだ内容にも関わらず、予想以上の数の美術館から丁寧に記入されたアンケートや添付資料を返送いただき、感激しております。各館にお送りしたアンケートを作成するために、学生たちは前期の授業の大半を費やし、自信を持ってお送りしましたが、回収し、いざ分析するといくつもの不備や理解の足りなさが見つかり、反省すべき点が多々あります。これは担当教員の指導と理解不足でもあります。そうした中、懸命に理解をしてお記入いただいたそれぞれの担当者の方々にあらためてお詫びと感謝申し上げます。

私自身は今年度、初めてこの授業を担当しましたが、平成生まれの学生たちの美術館への眼差し、評価基準にしばしば驚かされました。複数館の回答を総合、対比することで見えてきた設置母体や規模、地域により生じた格差と、それでもなお共通する課題の一端を実感する機会となりました。

近年、各美術館に大学等教育機関からの授業内や卒論準備のための調査依頼が数を増していると耳にします。実際、そうした理由を挙げて回答を辞退された館も複数ありました。そんな中で、これまで5年間の成果を引き継ぎ、「よそには負けない！」という気概を持って、懸命に集計、分析を加えたものがこの報告書です。これは学生たちの活動報告であると同時に、ご協力いただいた館へのお礼状でもあります。たとえ未熟な点を抱きつつも、継続することで、外からではわかりにくい美術館の姿が見えてくるのではないかと、あるいは内側で働くがゆえに慣れてしまった実情、各館に共通する問題を少しでもあぶり出せたかもしれない、という期待と自負を持ってお届けします。お気づきの点がございましたら、ご指摘、ご批評いただきますようお願い申し上げます。

2010年度美術館調査担当教員を代表して
林 洋子 (京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース学科 准教授)

わたしたちがみた 当世美術館事情5

10年度美術館調査報告書

Contents

はじめに 林 洋子 3

調査対象館一覧 6

第1章 美術館に踏み込む

1 数字でみる美術館 — 続・数字で変わる美術館— 柳井ちひろ 小笠原あずみ 12

2 美術館職員の雇用状況と業務について 加藤彩世 田村俊明 60

第2章 美術館を支える

1 展覧会クレジットからみる美術館と社会 伊藤良平 88

第3章 美術館から踏み出す

1 美術館と人をつなぐミュージアムショップ 吉田沙織 江藤靖峻 126

2 美術館と地域の連携 ～地域と手を取りあって～ 長崎有里 福地真理子 160

インターネット座談会 200

おわりに 山下里加 215

美術館調査紹介記事 216

バックナンバーのご案内 217

おわりに 5年目の美術館調査を終えて

本年度も5冊目となる『わたしたちがみた当世美術館事情』を刊行することができました。調査にご協力いただいた多くの美術館関係者のみなさまにお礼申し上げます。

2006年度から始まったこの『美術館調査』は、福のり子教授と私の共同授業という形ではじまりました。2008年2月には、大阪市にある国立国際美術館にて『知的ワンダーランドとしてのミュージアム～京都造形芸術大学美術館調査からみる美術館の今と未来～』を開催。その後も新聞や雑誌などで紹介していただき、学生たちの苦闘の成果が社会に小さな波紋を起こしたことは望外の喜びでした。本年2010年度は、林洋子准教授とタッグを組んでの授業となり、私が担当教員として関わる最後の年度になります。

5年分の調査冊子を読み返してみると、美術館をめぐる状況が、年々厳しくなっていることをひしひしと感じます。その変化は、予算や入場者数、学芸員や館長など美術館職員の勤務内容、教育普及や地域連携など展示以外の活動など、学生たちの調査に顕著に表れています。さらに学生の間でも、美術館に注ぐ目が変わってきているようです。

2006年度の学生たちのインターネット座談会では、「美術館はあって当たり前だろう」という漠然とした前提があり、そこから一般の人たちにどのように広報するか、敷居を低くしていくか、といった議論が展開されていました。しかし、2010年度の座談会では、「事業仕分け」を模倣した議論だったとはいえ、自由選択とした最後の結論でも、「休館」「予算の大幅減」があがりました。「現状維持」「予算増額」を支持した学生もほとんどが条件つきでした。芸術系大学で学ぶ学生にとっても、「美術館はあって当たり前」ではなくなってきているようです。

この5年で美術館調査に関わった学生は、のべ70人になりました。2006年度、2007年度、2008年度に『美術館調査』をやり遂げた学生のほとんどは卒業し、中には、美術館の教育普及担当として活躍している者もいます。また、美術教員になった者、ミュージアム・ショップを受託する企業や地域のアート・プロジェクトを運営するNPO法人に就職した者、自身でギャラリーを開いた者もいます。大学院などで美術に関する研究を続けている者、直接は美術館や美術に関係のない仕事をしている者もいます。そして、厳しい就職戦線で苦戦している者もいます。いずれにせよ、社会のどんな場面においても、大学生生活の1年間、寝ても覚めても美術館のことを考え続けた彼らは、今も美術館に強い関心を持ち続けています。

これからの5年もまた、美術館にとっては厳しい状況が続くと予想されます。それは学生や卒業生にとっても同じ。「当たり前にある」ことが難しい社会です。だからこそ、美術館という文化施設も、関心を抱いている私たちも、お互いに相手が「あること」「あり続けていくこと」の意味と価値を確かめあうことの大切さ、そのような関係が結べる相手がいることの貴重さを、5年間の美術館調査を通して実感しています。

最後に、手探りではじまった美術館調査を続けてこられたのも、学生たちの様々な問いかけに真摯に答えてくださった美術館関係者のみなさまがいらしたからこそです。あらためて感謝申し上げます。

京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース学科
准教授 山下里加